

# 安息日に良いことをするのは律法にかなっている

【聖書箇所】 マタイの福音書 12 章 9～14 節

## ベレーシート

●今回も前回に続いて「安息日問題」が扱われています。まずはテキストを読んでみましょう。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 12 章 9～14 節

- 9 イエスはそこを去って、彼らの会堂に入られた。
- 10 すると見よ、片手の萎えた人がいた。そこで彼らはイエスに「安息日に癒やすのは律法にかなっていますか」と質問した。イエスを訴えるためであった。
- 11 イエスは彼らに言われた。「あなたがたのうちのだれかが羊を一匹持っていて、もしその羊が安息日に穴に落ちたら、それをつかんで引き上げてやらないでしょうか。」
- 12 人間は羊よりはるかに価値があります。それなら、安息日に良いことをするのは律法にかなっています。」
- 13 それからイエスはその人に「手を伸ばしなさい」と言われた。彼が手を伸ばすと、手は元どおりになり、もう一方の手のように良くなった。
- 14 パリサイ人たちは出て行って、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。

## 1. 天の御国を示唆する重要な語彙

### (1) 「～から～へ通って行く」という「アーヴァル」(אָרַב)という動詞

【新改訳 2017】 マタイの福音書 12 章 9 節

イエスはそこを去って、彼らの会堂に入られた。

●12 章 1 節でイエシュアが「(麦畑) を通られた、～通り過ぎた」という表現がありました。そして今回のテキストである 9 節にも「～を去って、～に入る」という移動を表わす表現があります。いずれもヘブル語だと「アーヴァル」(אָרַב)という動詞の一語で表されます。特に 9 節はギリシア語原文では「去る(立ち去る)」と「入る(やって来る)」は、「メタバイノー」(μεταβαίνω)と「エルコマイ」(ἐρχομαι)という二語が使われています。しかへブル語では「去って、入る」を「アーヴァル」(אָרַב)一語で表されません。何の変哲のない場所の移動のように見えますが、イエシュアが通られるところはすべて、この世のただ中に(ある地点に)神の世界が通り過ぎる、御国が渡ってくることを意味しているのです。「アーヴァル」は「ヘブル人(「イヴリー」 אִיבְרִי )」の語源でもあります。聖書で最初に「ヘブル人」と言われた人物はア

ブラハムですが、それは「川を渡って来た者」という意味で、アブラハムはウルから川(ユーフラテス川)を超えて神の示す地へと渡って来た人物です。「ヘブル人」の概念とは、まさに神中心の価値観を持った存在を表わします。神から遣わされたイエシュアも同様です。イエシュアが「通られる、通り過ぎる」とき、そこに神(の世界)が「通り過ぎる」のです。それゆえイエシュアの「アーヴァル」(עָבַר)は非常に重要なのです。今回もパリサイ人たちが登場しますが、彼らは自分たちこそ最も神に近い存在だと自認してしました。その彼らこそ最も激しくイエシュアと衝突しています。なぜなら、人間的な価値観と神の価値観との相克が起こったからです。

## (2) 「安息日」という語彙

- 「安息日」にイエシュアが移動(アーヴァル)しています。「安息日」(「シャバート」שַׁבָּת)はパリサイ人たちが最も大切に、厳格に守ろうしてきた聖なる日です。本来、「安息日」制定は神と人が交わる日として設けられたものでした。それは神の国の完成(御国)を表わす語彙です。安息日の主である人の子であるイエシュアが、その安息日にどこで何を語り、何をするかによって、御国の本質が現わされているのです。マタイ 12 章では安息日に起こった二つの出来事を記しています。ちなみに、マタイの福音書では「安息日」という語彙が全部で 10 回出てきますが、そのうちなんと 8 回が 12 章 1~12 節に集中しています(1, 2, 5, 5, 8, 10, 11, 12 節)。

- イエシュアは御国の本質そのものです。したがってイエシュア(=御国)が通り過ぎることで、何かが引き起こされるのは当然のことなのです。とりわけ、安息日を守ることに熱心であったパリサイ人たちとイエシュアとの相克は、この「安息日問題」を境に対立はより激しさを増し、イエシュアを殺害する契機となっていきます。

## (3) 「見よ」(「ヒンネー」הִנֵּה)

- 新改訳 2017 の 10 節は「すると見よ」と訳されています。片手の萎えた人がいた。「見よ」を意味するギリシア語の「カイ・イドゥー」(καὶ ἰδοὺ)です。これをヘブル語にすると「ヴェ・ヒンネー」(הִנֵּה)となります。より正確に言うと「ヴェ・ヒンネー・シャーム」(「すると見よ、そこに」וְהִנֵּה שָׁם)とあり、そこで終末的な出来事が啓示されることを予感させます。なぜなら、ヘブル語の「ヒンネー」(הִנֵּה)は、聞くものに注意を喚起させる重要な語彙です。旧約ではしばしば「見よ。その日が来る。」といった表現で、**終わりの日になされる神の出来事を啓示する言葉**として用いられています。「ヒンネー」(הִנֵּה)が使われていると知るだけで、そこに起こって来る出来事を御国の視点で見ることを喚起させられるのです。礼拝でしばしば歌われる「見よ、兄弟が共に住む、なんとこの楽しさ」(詩篇 133:1)という歌は、終末的な祝福を預言する歌なのです。口語訳と新共同訳は、なぜか御国を示唆するこの重要な「ヒンネー」を訳出していません。

- このように、今回のテキストである 12 章 9~10 節には、移動を示す「アーヴァル」(עָבַר)、「安息日」

(「シャバート」 תִּבְרָת),そして「見よ」(「ヒンネー」 הִנֵּה)という語彙によって、御国を示唆することばが置かれているということです。そこで、今回のメッセージに入っていきたいと思います。

## 2. 片手の萎えた人とは

●「すると見よ、そこに」の「そこ」とはユダヤ人の「会堂」(συναγωγή)のことです。その会堂にイエシュアの敵対関係にある**パリサイ人**たちと**片手の萎えた人**がいたのです。「片手の萎えた人」という言葉を聞いて、どのようなイメージを抱くでしょうか。脳梗塞や脳出血を起こした人のイメージでしょうか。片手が萎えたとあるから、もうひとつの手は健全に動かせるかと考えるでしょうか。仕事が大工だったり、楽器を演奏するピアニストやバイオリニストだったりしたらどうでしょう。片手だけではそれまで出来ていたことができない気の毒な人、生活の糧を得ることができない可哀想な人と思われるでしょうか。しかし、「片手の萎えた人」がそこにいたのは決して偶然ではありません。御国を宣べ伝えるイエシュアのストーリーにおいて、「片手の萎えた人」がいたことには必然的な意味があるのです。

●ここで「片手」と訳されているのは、手(「ケイル」 χείρ、「ヤード」 יָד)が単数形だからです。しかし聖書で「神の御手」という場合、「御手」は双数形ではなく単数形が使われるのです。ちなみに並行記事のルカ福音書では「右手」となっています。神の手も「右手」で「神の力、わざ、創造力、支配力」を表します。とすれば、「人の手」も同様に単数であっても、「手が萎えた」ならば、人に与えられている能力や働き、本来のさまざまな力が機能不全を起こしている「型」として考えることができます。「萎える」と訳されたギリシア語は「クセーロス」(ξηρός)という形容詞です。ヨハネの福音書5章3節では「からだに麻痺のある人たち」で使われています。ヘブル語では「干からびた、枯れた」を意味する「ヤーヴェーシユ」(יָבֵשׁ)の単数女性形の「イエヴェーシャー」(יְבֵשָׁה)が使われています。これはエゼキエル書37章2,4節にある「**枯れた(骨)**、すっかり**干からびた骨**」(原文には「骨」ということばはありません)の幻に対する預言に使われています。ちなみにそこにも「見よ」(הִנֵּה)があり、終末に起こる預言であることが分かります。エゼキエルは主から尋ねられました。「これらの骨は生き返ることができようか」と。この質問に対してエゼキエルは「あなただけがご存知です」と答えました。それは人間的な視点でいえば、それは絶対に考えられないことという意味だったのです。同じことが「片手の萎えた人」にも言えるのです。

●エゼキエル書37章の「枯れた骨」とは**イスラエルの全家**を指しているのです。「イスラエル全家」には北イスラエルの10部族と南ユダ部族が含まれています。エゼキエルが「枯れた骨」に息を吹きかけると、息が彼らの中に入って、彼らは生き返り、自分の足で立ち上がったという預言です。この預言の成就是「終わりの日」(キリストの地上再臨の前)に実現します。彼らは主の御手によって民として回復されるのです。マタイの福音書で9章でも学んだように、12年間長血で苦しんだ**女**も、12歳の会堂司の**娘**もイスラエルを表わす「型」であったように、「片手の萎えた人」も**イスラエルの全家を象徴するたとえ**と言えるのです。

●イスラエルによって神は地上のすべての民族を祝福する計画でしたが、イスラエルの民はその神の計画

を担うことのできない機能不全を起こしていたのです。この機能不全が枯れた骨のヴィジョンです。しかし神はその骨にいのちの息を吹きかけることによって、癒やし、回復させたのがメシア王国の直前でした。メシア王国(御国)ではイスラエルの民は地のすべての部族の支配国となるのです。この神のご計画を示すたとえば、まさにこの「片手の萎えた人」をいやすことにたとえられていると考えられます。

### 3. イエシュアを訴えるための質問

●イエシュアが入られた会堂には「片手の萎えた人」がいたことから、パリサイ人たちはイエシュアを訴えるために、「安息日にいやすことは律法にかなっているでしょう」と質問しています。イエシュアに対して「訴える」ということばがここに初めて登場します。つまりパリサイ人たちはイエシュアを訴える証拠をつかむために質問をしたのです。どこに「訴える」のかといえば、当時の司法・行政の最高議会としてのサンヘドリンにです。サンヘドリンはイスラエルの民の長老制(民数記 11:16)に従い、71 人によって組織されていました。71 人とはモーセの他に 70 人の長老たちが選ばれからです。サンヘドリンの構成メンバーは、貴族階級の祭司たちと、長老の律法学者たち、およびパリサイ人たち、そして大祭司を議長としていました。サンヘドリンはローマ総督の承認(批准<sup>ひじめん</sup>)のもとにですが、死刑を執行することはできなくとも、死刑を宣告する権限はあったのです(マタイ 26:3)。ですから、確かな証拠があればイエシュアを罪ありとし、殺すことができたのです。

●「律法にかなっているか」と訳された語は「エイ・エクセスティン」(Εἰ ἔξεστιν)で、「～して良いかどうか、合法的かどうか」のいう意味です。12 章にはこのフレーズが 4 回使われています(2, 4, 10, 12 節)。特に、パリサイ人の問題点は、「安息日」の真の意味よりも、**安息日にいやしをすることは許されることか、それとも許されないことか、合法的か合法的か、それがすべての判断基準でした(19:3, 22:17)**。人のことは全く度外視していたことは言うまでもありません。もしイエシュアが「然り」と言えば、律法に公然と反した証拠を彼らは握ることになります。パリサイ人たちがふっかけた安息日問題に対してイエシュアはどのように対処したでしょうか。

### 4. イエシュアの応答

●今回のテキスト(9～14 節)は「キアスムス構文」になっています。以下がそれです。

#### (1) キアスムス構文

- A: イエシュアが会堂に入られた(9 節)
- B: すると見よ。片手の萎えた人がいた(10 節前半)
- C: 安息日に癒やすのは律法にかなっているかと質問した(10 節後半)
- D: イエシュアがたとえで答えられた(11～12 前半)

C': 安息日に癒やすのは律法にかなっていると答える(12 節後半)

B': 片手の萎えた人が癒やされた(13 節)

A': パリサイ人たちは出て行った(14 節)

●聖書にはキアスムス(交差配列法)構文がしばしば使われています。この構文に基づく聖書解釈の特長は、中心点が何かを示すことにあります。これまでもイエシュアはパリサイ人達の質問に対してたとえてこたえられています(マタイ 9:12,9:15~16)。ここでの中心点は「イエシュアがたとえて答えられた」にあります。このたとえを理解することが重要なのです。

【新改訳 2017】マタイの福音書 12 章 11~12 節

11 イエスは彼らに言われた。「あなたがたのうちのだれかが羊を一匹持っていて、もしその羊が安息日に穴に落ちたら、それをつかんで引き上げてやらないでしょうか。」

12 人間は羊よりはるかに価値があります。それなら、安息日に良いことをするのは律法にかなっています。」

●イエシュアは質問してきたパリサイ人たちに対して、逆に質問をしています。この種は当時のラビたちの間でよく行われていたことだったようです。「あなたがたのうちのだれかが羊を一匹持っていて」とありますが、これは多くの羊の中の一匹という意味ではなく、この一匹の羊がすべての財産という意味です。「その羊が安息日に穴に落ちたら、それをつかんで引き上げてやらないでしょうか。」とイエシュアは質問しています。当時の口伝律法では、安息日に穴に落ちた羊を救い出すことは認められていたからです。しかし、他の口伝律法では生命の危険さらされていない限り、病人を安息日にいやすことを禁じていたのです。とすれば、「片手の萎えた人」は生命が危険にさらされていないわけですから、安息日に癒やすことはタブーとなります。しかしイエシュアの質問は続きます。「人間は羊よりはるかに価値があります」と言って、「それなら、安息日に良いことをするのは律法にかなっています。」と結論づけました。

●イエシュアは人と動物と比較し、人が動物に勝っていることを根拠に論理を展開している箇所が以下のように三つあります。

①【新改訳 2017】マタイの福音書 6 章 26 節

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがた

の天の父は養ってくださいます。あなたがたはその鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか。

②【新改訳 2017】マタイの福音書 10 章 31 節

ですから恐れてはいけません。あなたがたは多くの雀よりも価値があるのです。

③【新改訳 2017】マタイの福音書 12 章 12 節

人間は羊よりはるかに価値があります。

●イエシュアの論点は、人間は「鳥よりも」「雀よりも」「羊よりも」はるかに勝っている。「それなら(そ

うゆうわけで)、安息日に良いことをするのは律法にかなっています。」というのがイエシュアの答えでした。こうした論法は、ラビたちがよく用いた「カル・バホメル(קל וחומר)論法と言われるもので、「小から大への議論」、あるいは「大から小への議論」と呼ばれるユダヤ的論法と呼ばれます。ここでは「小(軽い)から大(重い)への議論」になっています。

●「安息日に良いことをするのは律法にかなっています」の「良いこと」とはギリシア語の「カロース」(καλώς)で形容詞の good の意味ですが、ヘブル語では名詞の「トーフアー」(תּוֹפְאָר)が使われています。その初発箇所を見てみましょう。

【新改訳 2017】創世記 50 章 20 節

あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです。

●これはヨセフが語ったことばです。「良いことのための計らい」とは神のご計画にとって「良いこと」なのです。単なるヨセフ個人の事柄を超えた「良いこと」なのです。ヨセフ物語はそのあくまでもアブラハム、イサク、ヤコブへと受け継がれてきた神の約束がどのようにして実現されていくか、その通過点としての位置づけをもつての「良いこと」という意味なのです。同じように、「安息日に良いことをするのは律法にかなっています」とは、天の御国という神のご計画の完成が見据えられての「良いこと」と言えるのです。

●前回の説教で、「人の子は安息日の主です」という意味を取り上げましたが、その意味は、イエシュアこそ安息日を創造した方であり、イエシュアにとっては毎日が安息日だったからです。つまり安息日とはイエシュアにとっては実現したメシア王国そのものなのです。その王国において神の民となるべき者たちの存在は不可欠なのです。ですから、そこに「片手の萎えた人」(=全イスラエル)がいるなら、当然癒されて、元どおりに回復させなければならなかったのです。パリサイ人たちは、安息日を神と人とのかかわりものとして考えることよりも、人よりも法や義務、規則をなりよりも優先させる社会を構築し、神のご計画とみころとは正反対の歩みの中に生きていたのです。これはまさにヨセフの兄弟たちがした「悪」と似ています。しかし神はそれを良いことのための計らいとしてくださいました。その良いことの中に私たち異邦人の救いが含まれていたのです。

## 5. 「手を伸ばす」ということの預言的意味

●パリサイ人たちの問いに答えて、「安息日に良いことをするのは律法にかなっています」としたイエシュアは、片手の萎えた人に向かって、「手を伸ばしなさい」と命じました。この命令は「アオリストの命令形」で、自らの意思をもって、「手を伸ばしなさい」という意味になります。彼がそのようにすると手は癒され、もう一方の手のように元どおりに回復したのです。「もう一方の手のように」とあるのは強調表現です。そ

れはイスラエルに与えられた本来の役割と力と地位を取り戻したことを意味していました。

●さらに、「手を伸ばす」(「エテイノー」ἐκτείνω)という語彙について、ヘブル語では「パーシャト」(פֶּשֶׁט)という語が使われ、「突撃する、襲撃する」という意味です。名尾耕作の「ヘブル語大辞典」には「手を伸ばす」という意味を見つけられませんでした。現代ヘブライ語辞典では「手を伸ばす」という意味が確かに記されていました。「全く動かなかった手が突然にして伸びる」というイメージです。「すぐに」とか「突然」という語彙がなくても、「パーシャト」(פֶּשֶׁט)という語彙の中にそれが含まれています。どんなにしても動かなかった手も、回復させられるときには突然にして元の状態に回復するのです。「片手の萎えた人」の癒しは、イスラエルの全家はそのようにして回復されるという預言的な癒しの型だったのです。

## 6. パリサイ人たちの反応

●パリサイ人たちはどうだったでしょうか。イエシュアが御国のすばらしさを現わされたにもかかわらず、彼らにとっては、遂にイエシュアは安息日を破ったということしかありませんでした。これでイエシュアを訴える口実を見つけることができたことに、「してやったり」とほくそ笑んだに違いありません。

【新改訳 2017】マタイの福音書 12 章 14 節

パリサイ人たちは出て行って、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。

●この出来事を境に、パリサイ人たちは「どうやって殺そうかと相談し始めた」とあります。パリサイ人たちはそれほど仲のよくなかった祭司たちやヘロデ党の人々のところに行って相談したのです。その行きつくところは「十字架の死」でした。これは詩篇 2 篇が伝えている通りです。

【新改訳 2017】詩篇 2 篇 1~3 節

- 1 なぜ国々は騒ぎ立ちもろもろの国民は空しいことを企むのか。
- 2 なぜ地の王たちは立ち構え 君主たちは相ともに集まるのか。【主】と主に油注がれた者に対して。
- 3 「さあ彼らのかせを打ち碎き彼らの綱を解き捨てよう。」

●「地の現実」は上記のようであったとしても、「天の現実」は以下のとおりです。

【新改訳 2017】詩篇 2 篇 4~5 節

- 4 天の御座に着いておられる方は笑い 主はその者どもを嘲られる。
- 5 そのとき主は怒りをもって彼らに告げ 激しく怒って彼らを恐れおののかせる。

●パリサイ人たちがどんなにイエシュアを殺そうして悪を謀ったとしても、やがては神の安息である御国が実現するときは、神の御子メシアによって良きことがなされるのです。

